

中和ボランティアだより

発行 真庭市社協中和支所ボランティアステーション 令和6年1月

今回も好評でした！（令和5年12月20日実施）

歳末あつたか弁当

この事業はみなさまからご協力いただきました

赤い羽根共同募金 を財源としております

みなさん料理は
お手の物！

調理は
ささゆり会の
みなさんです

スタート



手際よく
盛り付けます



さあ
配達チーム
出発です！

配達は
社協役員の
みなさんです



まもなく完成。
おいしそう！



暖かい
うちに
お手元へ

ゴール



メッセージも
添えて
お届け
しました



◎「歳末あつたか弁当」は中和地区在住の75歳以上の独居・80歳以上の高齢者世帯などに手づくり弁当をお届けする事業です

◎お弁当の作成は「中和ささゆり会」・配達は社協役員のみなさんにボランティアとしてご協力をいただきました

● ボランティアのみなさん
ありがとうございました

● 裏面もあるよ



ボランティア昔ばなし

ちよ
適應の遊び

「浦島太郎」

昔むかし、海辺のある小さな村に浦島太郎という若者が住んでいました。太郎はとてもやさしい青年で、漁をするかたわら、きれいな海を守るために、毎日浜辺のゴミを拾うなどして美化活動にはげんでいました。そんなある日、太郎は浜辺で大勢の子供たちが亀をいじめているのを見つけました。

「ここに、弱い者いじめはやめなさい」と太郎は子どもたちに言い聞かせて、亀を助けてやりました。

「ありがとうございました。おかげで助かりました」亀は喜んで、竜宮城へ連れて行ってもらうことになりました。

海の底の竜宮城は赤や青のサンゴでできたそれはきれいなお城でした。まわりで輝く水の泡も宝石のようです。

そして美しい己姫様もいて、まるで夢のような世界でした。

己 「どうぞ」「ゆっくりしてじつてください」己姫様はそう言いながらおいしいお酒をついでくれます。

目前の食卓には世界中の海の幸が山のように盛られ、見たこともないごちそうであふれています。そして二人のまわりでは楽曲に合わせてタイやヒラメが舞い踊り、まさに天国とは云ふことかという風情です。

そんな夢のような生活の中で、太郎は楽しい日々を過ごしていました：



浦島太郎が竜宮城に来てもう数年が経ちました。

今日も太郎は朝から大酒を呑んで、ごちそうを食べてごきげんです。

太 「おーい、酒がないよ——どんどん持ってきてちょうだいよ——」

台所では己姫様とタイが洪い顔で話し合っています。

己 「乙姫様、あいつはいつまでいのちでしようねエ?」

「もう帰つてもらわなくちゃねえ。今日こそはつきり言つてやるわ」

「浦島さん、そろそろお帰りになつた方が…。家の人も心配しますよ…」

太 「あー、そんな心配は」むよー。それよりお酒がないよーー。」

己 「もういいかげんにしてくださいなー。」

「ナシダ? 帰れつてか? そんなことを言つうとオマエを刺身にして食つちやうぞーー」

「もう十分楽しんだでしょー! 帰つて下さいなー。」

「おやー。乙ちゃんまでそんな」と言つうの? ジヤあ帰つてやつてもじいけど、何かおみやげが

欲しけなあ。玉手箱のひとつくらいあつてもじいんじゃないの? ?

「まあ、なんでもうすうすうしーー! 何もありませんー!」

「そりですよ。とつとつ帰つて下そーー!」

太 「とつとつと帰れ? とつと? ハハ(さかな)だけにいーー?」

己 「いいからすぐ帰れ!」



こうして浦島太郎は竜宮城を追い出されて自分の村に帰つきました。

海で遭難したと思われていた太郎が無事に帰つてきたので、村人たちが喜んで太郎を迎えました。

そして太郎は竜宮城での楽しい日々をみんなに話して聞かせました。

(最後は追い出されたことはカッコ悪いので言いませんでしたが…)

太郎の話を聞いた村人たちはうらやましがつて、

「それはきっと太郎が進んで毎日浜辺の掃除をしたりして、ボランティア活動をがんばったから良いことがあつたのだ」と、噂をし合いました。

そしてみんなも太郎を見習つて、自分から進んで美化活動のボランティアにはげみました。

そのおかげで村の浜辺はゴミひとつない美しい海として末永く引き継がれ、ふるさとの誇りとなりましたとさ。

めでたし

めでたし

めでたし

めでたし